

初期仏典に学ぶ共生の智慧 スッタニパータとダンマパダより

著者	堀内 俊郎
雑誌名	国際哲学研究
号	3
ページ	77-79
発行年	2014-03-31
URL	http://doi.org/10.34428/00006688

初期仏典に学ぶ共生の智慧 —スッタニパータとダンマパダより—

堀内 俊郎

はじめに

仏教的共生は可能であろうか。可能であるとすればいかなる思想基盤に基づくのか。筆者は拙稿¹にて、共生概念の大まかな変遷をたどり、仏教的共生の思想基盤の一つとして、「捨^{しや}」が挙げられるのではないかと提起した。本発表では、初期仏教における共生思想の可能性を探りたいと思う。

ここで取り上げるのは経典のうちでも最古に属するとされる *Suttanipāṭa* と *Dhammapāda* である。取り上げるのは二つのみであり、また、翻訳も先学の訳に従うが、その中から、釈尊の教えの要点を抜き出してみようという野心的な心構えも筆者にはある。この両経から伺える仏教の基本的立場をその典拠とともに箇条書きにし、その中で、共生ということが初期仏教においてどのような位置を占めるのかについて考えてみたい。

1. 初期仏教の教え

- ・ 仏教は、表面的・利他的な事象ではなく、ものごとの結果や本質を見据える。
- ・ ものごとの結果や本質は、無常・苦である。

Sn, 33, 34 (悪魔)「子ある者は子について喜び、また牛のある者は牛について喜ぶ。人間の執著するもとのものは喜びである。執著するもとのものがない人は、実に喜ぶことがない。」

(仏陀)「子ある者は子について憂い、また牛のある者は牛について憂う。実に人間の憂いは執著するもとのものである。執著するもとのものがない人は、憂うことがない。」

Sn, 203 <かの死んだ身も、この生きた身のごとくであった。この生きた身も、かの死んだ身のごとくになるであろう>と、内面的にも外面的にも身体に対する欲を離れるべきである。

Sn, 804 ああ短いかな、人の生命よ。百歳に達せずして死す。たといそれよりも長く生きたとしても、また老衰のために死ぬ。

Sn, 762 他の人々が「安楽」であると称するものを、諸々の聖者は「苦しみ」であると言う。他の人々が「苦しみ」であると称するものを、諸々の聖者は「安楽」であると知る。

- ・ それは避け得ないことであるので、それ自身ではなく（たとえば永遠の命を望むなど）、それに向き合う心的態度を変えねばならない。

Sn, 204 この世において愛欲を離れ、智慧ある修行者は、不死・平安・不減なるニルヴァーナの境地に達した。

Sn, 805 人々は「わがものである」と執著した物のために悲しむ。〔自己の〕所有しているものは常住ではないからである。この世のものはただ変滅するものである、と見て、在家にとどまっていなければならない。

Sn, 809 わがものとして執著したものを貪り求める人々は、憂いと悲しみと慳みとを捨てることがない。それ故に諸々の聖者は、所有を捨てて行って安穩を見たのである。

- ・ それは自分で行う必要がある。

Dhp, 165 みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから浄まる。浄いの

も淨くないのも、各自のことがらである。人は他人を淨めることができない。

- ・無常・苦の世の中で最終的な安穩の境地は、解脱、つまり、煩惱や執着が消えて、再びこの世に戻ってこないことである。

Sn, 1086 「ヘーマカよ。この世において見たり聞いたり考えたり識別した快美な事物に対する欲望や貪りを除き去ることが、不滅のニルヴァーナの境地である。」

- ・仏教は執着を完全に離れることを説くが、それは「無我」に基づく。

Dhp, 62 「わたしには子がある。わたしには財がある」と思って、愚かな者は悩む。しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

- ・解脱のためには出家が必要である。

(上掲のSn, 805を参照。)

- ・ただ、在家者には在家の道がある。その在家者の目標は生天(天界に生まれること)にとどまる。

Sn, 188 信仰あり在家の生活を営む人に、誠実、真理、堅固、施与というこれら四種の徳があれば、かれは来世に至って憂えることがない。

- ・(まとめ)：行為とその結果(特に死後)に関して四つのパターンがある。(1) 輪廻再生を繰り返す、(2) 悪を行い地獄に堕ちる、(3) 善を行い生天する(天における生活は永久のものではないが)、(4) 解脱する(もはや迷いの再生を繰り返さない)。

Dhp, 126 或る人々は〔人の〕胎に入り、悪をなした者どもは地獄に堕ち、行いの良い人々は天におもむき、汚れの無い人々は全き安らぎに入る。

2. 初期仏教における共生

以上が仏教の基本的態度であるとして、そのなかから、「共生」、「多文化共生」ということはどのような位置づけを持つであろうか。仏教では徳目や修行法は多く説かれる。以下ではそのうち、共生に関するものを取り上げたい。

- ・出家者は悟りに至るために、俗世の喧騒を離れ独り居することが勧められた。
- ・たしかに愚かな者ではなく、賢者と交わるのはむしろ勧められる(ここで賢者とは賢い人一般ではなく、悟りを求める者)。しかし、そのような賢者がいなければ、その場合は独り居が勧められる。

Sn, 45-47 (cf. Dhp, 328, 329, 61) もしも汝が、<賢明で協同行儀正しい明敏な同伴者>を得たならば、あらゆる危難にうち勝ち、こころ喜び、気をおちつかせて、かれとともに歩め。

しかしもしも汝が、<賢明で協同行儀正しい明敏な同伴者>を得ないならば、譬えば王が征服した国を捨て去るようにして、犀の角のようにただ独り歩め。

われらは実に朋友を得る幸を讃め称える。自分よりも勝れあるいは等しい朋友には、親しみ近づくべきである。このような朋友を得ることができなければ、罪過のない生活を楽しんで、犀の角のようにただ独り歩め。

Dhp, 76 〔おのが〕罪過を指摘し過を告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢い人につき従え。―隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。

Dhp, 61 旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者か、または自分にひとしい者に出会わなかったなら、むしろきっぱりと独りで行け。愚かな者を道伴れにしてはならぬ。

- ・さらに、多文化の共生ということについて言えば、「論争の超越」が、共生の智慧として挙げられる。

Dhp, 6 「われらは、ここにあって死ぬはずのものである」と覚悟をしよう。―このことわりを他の人々は知っていない。しかし、このことわりを知る人々があれば、争いはしずまる。

Sn, 878 〔世の学者たちは〕めいめいの見解に固執して、互いに異なった執見をいだいて争い、〔みづから真理への〕熟達者であると称して、さまざまに論ずる。

Sn, 895-6 これらの偏見を固執して、「これのみが真理である」と宣説する人々、―かれらはすべて他人からの非難を招く。また、それについて〔一部の人々から〕称讃を博するとである。

〔たとい称讃を得たとしても〕それは僅かなものであって、平安を得ることはできない。論争の結果は〔称讃

と非難との〕二つだけである、とわたくしは説く。この道理を見ても、汝らは、無論争の境地を安穩であると観じて、論争をしてはならない。

- ・ただ、「多文化」の共生ということについていえば、論争を超越して、多文化共生がなしうるか。一つの方途を初期仏典に探るとすれば、それは、その人の言葉ではなくその行いを見ること、形而上学的な観点から無理矢理に共生を求めるのではなく、行いにおいて他人を害さない範囲で共存する、ということが挙げられよう（これに関連して、golden rule（黄金律）に対するsilver ruleということが想起されるべきである）。

Dhp, 19 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。一牛飼いが他人の牛を数えているように。かれは修行者の部類には入らない。

Dhp, 131 すべての者は暴力におびえる。すべての〔生きもの〕にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

略号・文献（引用中、カッコの表記を、() から [] 改変したところがある）：

Sn：『ブッダのことは スッタニパータ』中村元訳、岩波文庫、1958年。

Dhp：『ブッダの真理のことは 感興のことは』中村元訳、岩波文庫、1978年。

註

- 1 「仏教における共生の基盤の可能性としての『捨（upekṣā）』」（『国際哲学研究』1号、2012年、pp. 129-135）。また、『釈軌論』第2章経節（62）—（63）訳注—多文化共生の基盤の構築に向けての『法を説き聞き・法を聞く説く』こと—（『国際哲学研究』2号、2013年、pp. 153-164）も参照。